

# 「まちづくり」に関するボランティア理論 ～人間性豊かな「まち」を目指して～

塩野 敬祐

（2013年10月28日受理）

## 要約

ボランティアリズムには2種類あり、一つは、「互恵的利他心」と呼ぶべきものであり、もう一つは、それを超える「捨身の利他心」とでも呼ぶべきものである。前者は、進化生物学で説明可能で、互酬性が働く限り万人共通のものである。しかし、後者は、自分を犠牲にして他者の命を助けるという個体の生存に不利な動機を生み出すので共通遺伝子にはなりえないものであろう。すなわち、後者は、文化的無意識に属するものであると考えられる。

いずれのボランティアリズムも、利己的な人間の内奥に秘められているはずのものである。「まちづくり」において、そんなボランティアリズムに期待しなければならないとすれば、遺伝子の豊かさ、あるいは、文化的規範意識を湧出させることのできる、慈恵的環境を創り出さなければならない。そのためには、まちづくりの阻害要因となる認識不足、無関心、想像力の欠如、利己心、閉鎖的ライフスタイル、人間軽視の価値観・人間観・生命観の変革を迫る内的発見（自己開発）の仕掛けを創り出さなければならない。地域課題を学習する「まちの学校」、街角の「共生体験」、学校の「関わり授業」、NPO現場での「顔の体験」、参加型学習の「ワークショップ」、生涯学習の「自己実現学習」などの「人づくり」が「まちづくり」に結びつくはずである。

**キーワード** 人間性、互恵的利他心、ソーシャル・キャピタル、ボランティアリズム、まちづくり

## はじめに

1

施設ボランティアしかやっていなかったら、その施設の入所者のニーズしか見えなかっただろう。筆者は板橋区内で30数年ボランティアとしてさまざまな活動をする中で、人々の生活の中で生起するニーズを知り、さまざまな動機でボランティア活動を行う人々と出会い、今この社会の中でやらなければならないこととして、「まちづくり」のボランティア活動が見えてきた。

現在では、相互実現ができ、居場所が見つかる慈恵的まち（地域社会）をつくるという実践を始めたところである。そこで、方法に関しての研究、つまり、「まちづくり」活動に寄与するボランティア理論を構築したいと考えたわけである。

従来より、ボランティアとして、あるいは、人間としての普遍的な問いかけとして、「人間の果たすべき務めは何か？」という問題意識があり、そのためには、「生きている世界の原理を知りたい」というのがあった。また、ボランティア活動を推進する活動をライフワークとする現在、ボランティアの本質を説明する必要性があって、人間の本質、つまり人間性の研究にも着手している。それを、本稿では、進化生物学の知見をもって考察する。

さて、主要テーマである「まちづくり」と「ボランティア（ボランタリズム）」の関係は、まちづくりの根底にボランタリズムを位置づけ、そのボランタリズムの核として「愛他的利他心」とでも呼ぶべき人間性をとらえ、人間性の湧出を図る「まちづくり」を推進することを目指すのである。

## 第1章 概念規定

### 1. 「人間性」を生み出すもの

まず、「人間性」を定義しなければならない。国語辞典の字義から見てみる。

人間性：① 人間としての本性。人間らしさ。

② 人間だけが持つ当為・理想。ヒューマニズム。

『日本語大辞典』（講談社）

本稿では、「人間性」を「豊かな人間性」という表現で概念規定する上で、上記辞典を意識して、人間の本性の中の「やさしさ」、「人間があるべき理想に近づこうとする心性（心の性質）＝真・善・美・正義などの価値追求の欲求」、「ヒューマニズム（人道）」といった意味に定義する。

本章では、人間には普遍的にそうした性質が備わっているのだということを、根拠を示しながら論じる。

#### (1) 生来の「適応的遺伝子」、後天的な「文化」

進化生物学者では、ボランティア活動にかかわりのある人間性を生み出すものを示唆する研究が進められている。長谷川寿一、長谷川眞理子著の『進化と人間行動』は、潜在的な人間性を科学的に解明した業績として評価されるべきであろう。その引用を論拠にして人間性を考察する。

「動物が血縁関係にある個体に対して利他的に振る舞う行動が進化することを検討しました。では、血縁関係にない個体に対しては、利他行動は生じないのでしょうか？ そんなことはありません。ヒトに近縁な霊長類の社会でも、哺乳類でも、赤の他人どうしが助け合うことは知られています。」<sup>1</sup>

「動物が血縁関係にない個体に対して利他的に振る舞う利他行動の進化の一つのシナリオ

が、互恵的利他行動 (reciprocal altruism) と呼ばれるものです」<sup>2</sup>

つまり、進化生物学は、人間の本性の中に「互恵的利他心」が備わっていることを明らかにした。集団を形成し社会生活を営むようになり、その環境に適応するために有利な「互恵的利他心」とそれを司る「社会脳」が生み出され、進化してきたというのである。

さて、そうした進化によって作られた人の本性に対して、後天的な文化の学習によって作られた人の本性を強調することができる。この点に関して、進化生物学は以下の主張を行っている。

「進化心理学者のトゥービーとコスミデス (Tooby & Cosmides, 1992) は、『文化とは独特の現象であり、生物学に還元することはできない』とする文化人類学や、『人間行動は要素的に分解可能な学習の積み重ねで形成される』とした行動主義心理学などを『標準社会科学モデル』と呼び、ドグマとして批判した。… 人間性の諸要素に遺伝的な基盤があるということを示すことも困難ですが、それが無いことを示すことはもっと困難です。』<sup>3</sup>

「イデオロギーでなく、科学的に人間の研究をしていく限り、生物としての人間が持っているものを知ったうえで、社会や文化がどのように影響を与えているかを探るのが重要だと思います。」「『人間の本性など存在しない』という考えの証拠としてあげられた研究に、文化人類学者のマーガレット・ミードの研究があります。『サモアの青春』＝性にまつわる考えや習慣は文化によってなんとでも変わるといことです。… しかしながら、その後の厳密な再検討の結果、これらの調査結果は正確なものではなく、… マーガレット・ミードの南太平洋研究は、信頼性の低いものであることがわかりました。』<sup>4</sup>

結局、人間の本性には、生来的なものと後天的なものが同居していると考えerべきではないだろうか。上記した「互恵的利他行動」は先天的であり、「道徳的行為規範」は後天的である。後者は、文化の学習によるものである。文化は、雨水が地面の滋養になるように、人々の心に沁みこんで、知識や価値観、規範を与える。文化は、その文化圏内の国家や地域の社会に、秩序をもたらす。

## (2) 社会脳仮説

社会脳仮説というのは、「霊長類の社会性が脳の進化を促したという考え」<sup>5</sup>であり、「霊長類では、社会的相互作用を交わす相手の数が増すほど、新皮質の進化がうながされたと考えられます。この相関関係は、社会脳仮説の有力な証拠だと言えるでしょう」「社会脳仮説を援用すると、互恵的な利他行動をしばしば行っているチスコウモリは、そうでないコウモリたちよりも、大脳に新皮質の占める割合が高いだろうと予測されます。そして、まさにその通りなのでした。』<sup>6</sup>

「猿や類人猿は、同種個体が単に群がって一緒にいるだけでなく、生活時間の多くを毛づくろいや子守り、けんか、仲直り、遊びといった社会交渉に費やしています。社会で暮らす中で、彼らは他者の行動の予測に敏感であるばかりでなく、他者どうしの関係も認知し、それを自分と他者の関係に関連付けることができます。』<sup>7</sup>

### （3）進化に有利なものとして受け継がれてきた人間の本性

人間の本性を明らかにするには、文化圏を超えた普遍性を見出さなければならない。

たとえば、人の親切は世界共通の行為パターンだが、岡田はそれについて、「社会進化論的に言えば、人に親切にするという行動が発達してきたのは、それが種の生き残りにおいて、有利な点があったからだ」<sup>8</sup>とその普遍性を説明する。

筆者は、ボランティアに関係する人間の本性としては、人間の生得的機能の中で、長谷川の指摘した感情システムすなわち「情緒的機能」に加えて、「社会的機能」を挙げる。これは、人が所属欲求をもち集いの中に安心と楽しさを見出すことを見ても明らかである。

### （4）心理学の知識

宮城音弥はその著書『人間性の心理学』の中で、人間の孤独が、厚みのある文化を生み出すとして、「公平性・平等性の規範」、「審美」等を例示している。つまり、平等な関係を作り上げるとするのは人間らしい本性であり、それが孤独から遠ざけるということになる。<sup>9</sup>

神谷美恵子はその著書『こころの旅』の中で、1歳で、社会性、感情生活の始まりを認め、同情心が発現するとしている。また、利他的感情は、2歳ころから。文化的価値や文化的拘束が取いられるのは3～6歳である。そして、11～18歳の思春期において、「自己對自己という精神構造の分化はヒトだけ」ということで、それが人間性の開花であるとしている。具体的には、「自意識の発達、こころの飛躍（想像力がふくらむ）、こころの友を求める、もろもろの価値、世界観の中から選択をするようになり、何を選ぶかで一生の心の旅の内容は決定づけられる」としている。また、他者への信頼に関しては、ポウルビィの説を引用して、乳児期の「基本的信頼」の獲得について、「母の愛を受けない子は、自分以外の人やものに愛情や興味を抱くことはできない。その『基本的信頼』は、わからないことに耐える力を与え、世界を支える者への信頼を形成するので、一生を通じて深められていかななくてはならない」と述べている。<sup>10</sup>

さらに、マズローの欲求5段階説の概念枠組みでは中間に位置付けられた「所属欲求」は、「自己実現欲求」の一つ手前の欲求だが、より下位の「安心欲求」で満ち足りないために、それ以上の成長を促す意味で大切な欲求であると考えられる。

### （5）教育制度が作る文化

第15期中央教育審議会第一次答申において、「豊かな人間性」については、生きる力を構成するものとして、自ら律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心、（美しいものや自然に）感動する心など、と説明している。また、正義感や公正さを重んじる心、優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かい心、ボランティアなどの社会貢献の精神などが、その資質・能力として強調されている。

さらに、臨時教育審議会第一次答申（昭和40年）においては、「思いやりの心、生命を尊重する心、自然を大切にし畏敬する心、責任感や自立自助の精神、自己抑制力、礼節、やさしさや豊かな感受性など」を類似する徳性として挙げている。このように、豊かな人間性は、

知情意の中では、情意に属する心情、徳性が強調される。

こうした教育行政の方向付けは「教育基本法」第1条に示されている。

（教育の目的）第1条 「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」

つまり、教育の目的は、人格の完成にあり、知情意体の調和のとれた自我を形成することにある。

ちなみに、『新学校用語辞典』に記載されている「人間性」の意味は、「人間に内在して人間を人間たらしめる本質・本性」とある。

## （6）まとめ

本稿では、人間の生来的な機能として「人間性」をとらえる。子どもを見ればわかるように、人間は、身体的機能、知的機能、情緒的機能、社会的機能が生まれながらに備わっていて、社会とのかかわりの中で発現され、その際の機能快が動機づけとなって更なる発揮がなされ、成長発達するものである。機能主義的に言えば、「人間性」は機能の働くところに存在するのであって、脳や心の中にある実体ではなく、性質としての内容を表現するものである。脳科学であれば、社会脳の働きとして物理的に説明・表現可能であり、心理学であれば認知心理学として抽象度の高い説明・表現可能であり、進化生物学であれば、霊長類の進化過程の痕跡と現存する未開社会の習俗の証拠をもって説明・表現可能であり、社会学であれば社会病理の原因を分析することを通して、精神医学であれば、現代人の精神疾患の原因の分析を通して、失われた人間性の働きを説明・表現可能である。そして、本研究が取り上げる「まちづくり」のボランティア活動の展開の中に、確かにその発揮が希求される「人間性」が人々の意識に共有され、その発揮の土壌をつくりあげる営みがあり、正にそこに「人間性」が機能しているという、その証拠を示して説明・表現可能なのである。

以上のように、「人間性」の根源を考察すると、人間には生得的に、他者との共生を求める「共生欲求」が備わっているはずであるし、後天的にも、「共生の文化」が生まれるはずである。これらが、人間性の基盤となる。人間性は、後天的に与えられた文化的価値の規範（拘束）によって湧出するのではなく、換言すると、脳の表層の知的機能によって動機づけられるものではなく、脳の深層にある情・意の機能によって動機づけられ発現するものである。これまで、あまりにも、知的機能の進化にばかり目を奪われてきた人類は、これからは、人間性に着目して、環境に適応した自然な生き方・ライフスタイルを模索しなければならないだろう。

われわれは、知的機能と情緒的機能・社会的機能の使い分け、あるいは、適応的遺伝子ともいえる「互惠的利他行動」と道徳や宗教的教義との使い分けということに関して、意識的に探究し、それを思想的な潮流にしなければならない。道徳や宗教的教義は、その規範圏においては秩序をもたらすが、国家間の戦争に際しては国民の攻撃行動を動機づけ社会全体を無秩序へ動かす潮流になっている。つまり、グローバルな社会にあっては、国家間の社会

連帯も考えなければならないのであり、道徳や宗教によらない、人間の本性をとらえなおすことから考えなければならない。たとえば、マザー・テレサが国家間、宗教間、あるいは階層間の連帯を勝ち得たのは、その信仰が認められたからではなく、マザーの内奥から湧き上がった自発的な責任感が彼女に行動を起させ活動を支えたのである。その思想は、世界的に大きな影響を与え、ノーベル賞も授与されている。

以前、ボランティア文明ということを知り、ボランティアが社会全体の潮流を動かすなどと言うことはずいぶん大袈裟な表現だと思ったことがあった。今から40年も昔の事である。今にして思えば、それは先見の明であり、ボランティア活動が現代人に指し示す人間のあり方こそ、これからの人類の歩むべき道を提示しているのかもしれない。つまり、あまりに知的機能の発揮で社会が作られ、それこそが人間らしさであり価値あるものであるという幻想によって、情緒的価値は審美的な価値観を持つ一部の芸術信奉家だけが追求し、一般には余暇の贅沢物くらいに扱われてきたのではなかったか。人間社会を人間らしくするには、つまり人間性豊かな社会を作り上げるには、感情の世界を広げたり、社会的連帯を広げたり、あるいは、感情や連帯にとって滋養的な環境を整えることに目を向けることが、思想的に求められているのではないだろうか。

## 2. 「まちづくり」の定義

### (1) 「まち」概念の広義性

まず、本稿では、「まち」をどう定義するか。

「〇〇市まちづくり計画」という時のように、基礎自治体である市区町村を指したり、小学校区や中学校区のようにある基準に則って分類するものもある。さらに、基礎自治体をさらに細かく分ける行政区として「地域センターエリア」を指すこともある。いずれにしても、「地域社会」という言葉に換言される。

新しく創造される地域社会という意味をこめて「コミュニティ」という表現も代替される。元来のcommunityは、「欧米の住民がその地域生活のいろいろな共同性を表現するのに使用する。」<sup>11</sup>言葉であったようだ。今日の伝統的共同体が解体しつつある日本社会では、従来の「地域住民」の活動だけで地域社会が構築されるのではなく、同じ目的を持った「ボランティア」や「NPO（非営利組織）」も地域社会の創造に参加する現状をふまえ、それら両者をコミュニティ活動と総称し、その活動によって新たに作られる地域社会を「コミュニティ」と呼ぶものである。論者によっては、「市民社会」という言葉も代替可能とするが、これは、伝統的な町内会を構成する古いタイプの「地域住民」よりも、自覚的な「市民」（ボランティアやNPO）に焦点をあてた概念なので本稿では用いない。地域住民と、いわゆる市民活動をするような市民が混在する地域社会をイメージしているからである。また、「まちづくり」は動的な概念であるから「コミュニティ化（コミュニティ化）」と呼ぶべきかもしれない。

社会学では、マッキーヴァーが1917年に設定した「コミュニティ」と「アソシエーション」の分類がある。「まち」と言えば、前者に該当する概念であり、その特徴は、「人間の共同生活

が営まれている一定の地域であり、一定の地域に住んで、生活の種々の側面にわたってお互いに接することにより自ずから共同の社会的特徴を生じている、ある程度の包括性や自足性をもった社会や集団をさしている。その共同の社会的特徴としてマッキーヴァーがあげているものは、社会的類似性、共同の社会観念、共同の習慣、共同の伝統、共属感情等である<sup>12</sup>。

最近では、住民生活を支えるセクター分類がなされることがある。第一セクター（行政セクター）とか、第二セクター（営利セクター）とか呼ばれるものである。そうした分類では、第三セクターは、市民セクター、非営利セクター、ボランティア・セクター、非政府セクターを含む。しかし、地縁セクターと血縁セクターは、相互扶助セクターとして別の位置づけが与えられるのが一般的である。本稿の「まち」の概念に含まれるのは、住民主体、市民主体の観点からは主に第三セクター及び相互扶助セクターを指すのであるが、公私協働や「新たな公共」が言われる今日、第一セクターと第二セクターとのコラボレーションに基づく「まち」概念を取り込むことになる。

一方、住民の意識レベルで考えると、「わがまち意識」のある生活空間とえば、人によってその空間的広がりやまちはまちであろう。また、一人の人でも、状況によって、異なるまちの広さをイメージすることもある。ただ、この意識レベルの範囲設定が非常に重要な意味を持つのは、「互恵的利他行動」はもともと顔の見える関係の生ずる集団において発生したからである。

そこで、ここでは、一律な広さを表す定義をするのではなく、「身近な地域社会といった」あいまいな言葉のまま用いることにする。論述するうえで、明確な概念規定が必要であれば、そのたびに、その際の「まち」を定義することにする。

## （2）まちと社会連帯

進化論的社会変動論を説く社会学者のデュルケムは、著書『社会分業論』において、現代社会の「社会連帯」には、伝統的連帯（機械的連帯）と有機的連帯の2種類のものが混在していることを説明した。そして、分業は経済的効果ばかりか道徳的な効果をも有するものと考え、後者の連帯こそ、人間個人の個性を増大させながら社会全体を発展させるものであるとした。

「友人同士の小集団が形成され、そこにおいて各人は自己の特性に適した役割をもち、奉仕の真の交換が行われるのである。一人は保護し、一人は慰める。後者は助言し、前者は実行する。『これらの友愛関係を決定するのは、機能の分担であり、慣用の表現を用いるとすればそれは分業である。』『分業の真の機能は二人または数人の間に連帯感をつくることである。』」<sup>13</sup>

このデュルケムの視座は、進化生物学のいう「互恵的利他行動」が分業によってさらに進化することによって連帯の質を向上させ、人類により豊かな人間性をもたらしたことを示唆するものである。

さて、「まちづくり」という際、今日においては、人口の流動化を阻害要因として考えなければならぬ。古参の地域住民は、なじみの人、集団、モノ、制度などをイメージすること

が多いが、新参者は、周囲に知人は多くない上に価値観の多様な人々をイメージする。社会学でいう「砂の社会」であり、ばらばらの個人は分業も連帯感も喪失した地域社会に存在する。

その新旧の住民がともに、新たな社会連帯を築くのが「まちづくり」の本質である。価値観が多様化した現代において、かつての伝統的連帯（機械的連帯とも呼ばれ、意思以前に形成されるもの）と呼ばれた共同体社会にもはや立ち戻ることはできない。近代的自我を確立し、主体的意思を持って生活する市民がどうやって、かつての社会が持っていた共同性を取り戻すことができるかということが問題である。

### (3) まちづくりの主体

近代国家形成過程では、希薄化する相互扶助に代替する生活の共同性を取り戻そうとする市民活動が発生するのは必然である。たとえば、拡大多様化する個々の社会問題に対して解決を志向する公益活動を展開するボランティア活動が生まれる。それに加えて、制度的に、公私協働で進めようとする地方自治体がある。いずれの主体も、同じ「まちづくり」という課題をもつ。換言すれば、「新たな社会連帯の構築」である。それが「まちづくり」の目的となる。

## 3. 「ボランティア」の定義

「ボランティア」という言葉は、わが国では、第二次世界大戦後の民主主義や住民自治概念とともに入ってきたといわれる。しかし、ボランティア活動の意味は個人の自発性で行われる行為であり、それ以前から日常的に行われてきたことである。そうした自発的活動が、集団的・組織的に展開されたり、社会に対してムーブメントを起こそうとする活動が生まれて、それに対し、その名称を冠したのであろう。つまり、原初的な個人個人の活動も、ボランティア活動であり、より組織的で対社会的なものまで含む幅広い概念と考えることができる。

さて、その自発的な意思とは、どのようなものであろうか。本来、ボランティアは特別な人がやるものではない。キリスト者が「隣人愛の行い」をしたり、仏教者が「菩薩行」を行ったり、イスラム者が「喜捨」を行ったりすることを見ても、文化・宗教を越えた利他的行為の同型性があることがわかる。つまり、本来、人間の内奥に利他の遺伝子があるということである。つまり、進化の過程で、利他という選択は、環境に適応的で有利だったために連綿と受け継がれてきたといえる。進化生物学では、「互惠的利他行動」と銘打って研究が行われている。それは、人間の意思以前の、心の内奥からくる動機であり、内面の人間性の表れと解釈することができる。

しかし、ボランティアを単に「互惠的利他行動」の現われとして考えるだけでなく、逡巡した後の選択の証であると考えなければならない場合もある。例えば、多忙な人が、現地に飛んで行って震災ボランティアに加わりたく願ってもその余裕がなかった。そこで、取りあえず、義援金を送ったという人がいた。あるいは、ホームレス支援のボランティア活動を行った人も、以前は、路上で凍えているホームレスを見て、何かしてあげたいと思いながらその勇気はでなかった。もっと卑近な例で言えば、混雑した車内で座っていると高齢者が目の前に立ったが、席を譲るのが道徳的に正しいこととわかっていながら、恥ずかしくできな



かったということである。つまり、「互恵的利他心」や後天的な道德心が備わっていても、状況の中で表出されるか否かは、その時の意思が左右するということである。

さらに、「互恵的利他行動」を超えるボランティア活動にも目を向けなければならない。この種のボランティア活動は、「顔の体験」によって現われてくると考えることができる。マザー・テレサがカルカッタの道端に現われた貧しい少女の顔との出会いを語っている。それは、その少女に導かれ、極限の貧しさの中にある人が見せた互恵的利他行動の姿であり、マザーが教えられた人間性との出会いの体験だった。こうした「顔の体験」について、哲学者のレヴィナスの「他者」の顔をめぐる著述から、人間の倫理と理性の湧出を引き出す体験について引用する。「顔と呼ばれるものは、自己による自己の、比類のない現前化にほかならない」<sup>14</sup>であり、それは、「私の自由を制限するものではなく、増進させる。私のうちに善さを生み出すことで、私の自由を増進させるのである。」<sup>15</sup>「私の自由を傷つけるのではなく、私の自由を責任へと呼びもどし、私の自由をむしろ創設するからである。」<sup>16</sup>すなわち、そのようにして、顔の体験によって、内面の善なるものが首をもたげ、自発的責任感が生じて、ボランティア活動となる。その個別性をとらえなければならない。

## 第2章 人間性が損なわれる社会

人間性は、人間の生得的機能、潜在能力、社会規範によって動機づけが与えられた行動の中に現われ、その結果として社会に秩序がもたらされるものである。それぞれの動機づけは、進化の過程にみられた社会環境や、産み育てられた家庭環境や、所属する社会の多様な規範によって、人間性の現れが異なることを示唆している。同時に、それらの多様な動機づけが障害をもつとか、自信を失うとか、規範が緩むとかの理由で妨げられれば、その人間性が発揮されず、集団の秩序、共同体の秩序、あるいは、社会の秩序が保たれなくなる。さらに、その場合の人間性を逸脱した個人は、その周囲からの制裁や罪悪感によって苦しめられるという結果がもたらされる。

本章の狙いは、その人間性が発揮されない要因を明らかにすることである。そのため、個人に焦点をあてたり、社会に焦点をあてたり、さらに、個人と社会環境との間に焦点をあてたりして、その全体像を明らかにする。

### 1. 人間性の発揮を妨げる個人的要因

#### (1) 人道の敵

本稿では、「人間性」を定義して、その一つの意義を「ヒューマンイズム（人道）」とした。そのヒューマンイズムを妨げる要因から考える。

赤十字運動の指導者のひとりであるピクテは、人道の敵として次の4つを挙げている。<sup>17</sup>

- ① 利己心
- ② 無関心
- ③ 認識不足

#### ④ 想像力の欠如

利己心は、もちろん人間の本性に含まれるものである。ただし、旧来の共同体社会の中では、集団の掟によって利己心が抑え込まれたり、習俗や宗教的教義によって自発的に抑えたりするのが常だった。しかし、第二次世界大戦後の日本社会では、個人主義が台頭して家や村に縛られる事も少なくなり、利己的な個人主義が拡大した。

### （2）人間性の湧出を妨げる精神の病理

『社会脳』の著書である精神科医岡田尊司は、その出版以前に『人格障害の時代』を執筆した。人格障害は、自然な社会関係が営めなくなる病気であり、豊かな人間性の湧出が妨げられ、本人も周囲も不幸に陥らせることになる。<sup>18</sup>

その第7章「浸透する人格障害の背景」の見出しをみると、「社会倫理の弱体化と躰・教育の変容」、「自己愛的精神構造から自己愛障害的精神構造へ」、「実存主義的価値観の功罪」、「人格障害を生む資本主義」、「社会が陥る二つの極」など、原因が社会にあることを説明し、それによって苦しむ子供が増えていることを危惧している。

そして、次の第8章「人格障害から子供と社会を守る」の見出しは、「治療以上に養育支援と教育が重要」、「学校に求められるもの」、「良識の復活と責任ある個人」、「空虚を埋める新しい価値」、「生きる力をつける援助と教育」と解決の道筋を示している。

## 2. 人間性の発揮を妨げる社会的要因

### （1）全体社会の影響

現代社会が陥っている病理のメカニズムをいくつか図式的に例示する。

- ①「物質的豊かさ、便利さの追求」⇒ 家族・地域の集団の機能の外部化（互いに担い合ってきたものを）
- ②「不平等社会の蔓延（格差、不本意な仕事）」（ストレスの増大）⇒ 「うつ病」など心の病 ⇒ 人間性喪失
- ③「文化の希薄化（世俗化等）」（「自己の精神的位置付け」不明瞭＝実存的孤独）、「自己愛」 ⇒ 規範と秩序の喪失 ⇒ 人格障害⇒人間性喪失
- ④「異文化対立」（偏見、不安、摩擦の増大）
- ⑤「環境破壊」（健康被害、精神的癒しの喪失）
- ⑥「家族機能の低下」（共生欲求の不充足、基本的信頼の喪失、互助的かわりの希薄化）
- ⑦「大規模災害の増加」（生活の根幹が奪われる喪失体験）

上記岡田の著書によって、人格障害の背景にあるものと指摘された「倫理や規範が弱体化」「自己愛性」「資本主義社会による膨張する貨幣経済」などが上記メカニズムに密接に絡んでいる。ここで、再びその言葉を引用する。

「貨幣も、目的や生かされる場を持たなければ、それ自体では、空虚なものである。自己愛や貨幣は、『今』という瞬間だけ生きる名前のない欲望なのであり、他者という媒介なくしては、価値を失うのである」<sup>19</sup>

## （2）地域共同体の衰退の影響

都市化が進み、地域共同体は衰退した。それによる「つながりの希薄化」は大きな社会問題となっている。それによって引き起こされる心理的メカニズムを図式化する。

- ① つながりの希薄化 ⇒ 「自己の社会的な位置づけ」が不明瞭となる ⇒ 一方で、平等なかわりを喪失する ⇒ 実存的孤独、自己愛 ⇒ 「互惠的利他行動」の後退、共生欲求の不充足 ⇒ 人間性喪失
- ② 社会的孤立、孤独（挨拶も無くなる） ⇒ 不安・孤独感などストレスの増大 ⇒ 「うつ病」など心の病 ⇒ 人間性喪失

## 第3章 まちづくりがもたらすもの（まちづくりの要素）

国や自治体の財政難が進んだ1980年以降、公私協働論や「まちづくり」論が行政主導で活発に論議されるようになった。そのような潮流には、「安上がりの福祉社会」を目指す政府の考えが見え隠れする。ボランティアがその片棒を担がないようにするためには、「まちづくり」の目的とその目的達成のための方法論を自ら構築しなければならない。

### 1. 時代の要請、市場経済を超える領域の発展

資本主義の展開という流れが成熟ないし定常期に入り、その飽和とともに「市場経済を超える領域」が大きく展開する時代であり、そこでは、「新しいコミュニティ」の創造ということが中心的な課題となる。<sup>20</sup>

「私利の追求」を有効なインセンティブとして拡大・発展した市場経済の領域が、今はむしろ飽和しつつある。これに代わって、「時間の浪費」と呼んだ、コミュニティや自然や公共性、スピリチュアリティといった領域に関する人間の欲求が大きく展開しつつあり、組織的にはNPOや社会起業家といった形態が浮上している。

一方、労働という面から見ても、現在の先進諸国はいわば、生産性が上がりすぎた社会となっており、構造的な生産過剰状態にあり、失業が慢性化する状況になっている。したがって、むしろ賃労働の時間は減らし、その分をコミュニティや自然等に関する活動に充てることで、市場経済を超える領域の発展につながるようになる。<sup>21</sup>

### 2. 新たな共同体と人間性の湧出

地域住民（市民、ボランティアを含む）は、まず現状認識をして、なぜ「まちづくり」を推進しなければならないのかの共通認識を形成しなければならない。社会学でいうところの、イエ制度、ムラ制度の崩壊による個人主義の台頭が、人間関係の絆を徐々に断ち切って孤立する人々の問題を現出させた、また、競争社会は人々の精神文化を後退させ、リスク社会は時に大きな生活破壊をもたらす。そうした社会はストレスを高じさせたり、信頼感を失わせたり、孤独感・不安感を増大させて、その結果、社会問題の多様化・拡大を生み出している。

これから、私たちが挑戦する「まちづくり」は、それらの原因を構成するものに対して、

まず、住民自身が認識をし、関心をもち、想像力を働かせて、問題解決の道を探り当て、利己心を超克して利他的な行動へと収斂させなければならない。それには、「人間性の湧出」というゴールに向けたいくつかの過程を踏む必要がある。

①「つながりの再構築」⇒「互恵的利他行動」の湧出 ⇒ 相互扶助・相互実現社会 ⇒ 人間性の湧出

②「文化の再構築」⇒「規範と秩序」の復活 ⇒ 精神世界の安定 ⇒ 人間性の湧出

③「平等な社会とのかかわり」⇒ ストレス緩和。人格障害の予防・治療効果 ⇒ 人間性の湧出  
そして、目指すべきゴールは、最貧国の人々が互いに助け合い・励まし合うように、共生という真の豊かさを取り戻すことである。しかし、だからといって、旧来の共同体に戻すことではない。旧来の共同体の問題を克服した新たな共同体の形成を目指さなければならない。見田宗助は、それを「交響体」と表現している。

「これまでの共同体の問題点は、個人の自由を抑圧するところでした。抑圧には二つあり、一つは閉鎖性、一つは同質性です。それに対して、開放性と異質性——異質性とは、異質なメンバーの多様性というものをポジティブに評価していくということです。」<sup>22</sup>

「無数の小さな、開放的で異質なものを許容する自由な交響体というものがあって、それがお互いに、ほかの交響体を尊重し合いながら、自由なルールにもとづいて連合体をつくる。」<sup>23</sup>

### 3. ソーシャル・キャピタルの意義

また、近年、「つながりの再構築」に関しては、「ソーシャル・キャピタル」という概念で語られている。「ソーシャル・キャピタル」は「社会関係資本」と訳されるが、その特徴は、「まち」に、社会的ネットワーク（絆）、信頼、互酬性の規範を持続的にもたらすものである。それは、コミュニティの潜在力を表すとも言われる。

「キャピタルとは、『資本』であり、蓄積されたり消費されたりするものである。ソーシャル・キャピタルにおいても、人々の社会的な関係の在り方が、計測可能で蓄積された資本としての意味をもつという考え方が前提となっている。」<sup>24</sup>

この概念が注目されるきっかけをつくったのは、アメリカの政治学者パットナムであり、その著書でソーシャル・キャピタルの高低を比較する指標を示したが、そのいくつかを紹介する。<sup>25</sup>

- ・ 公的問題への参加の指標：公的な集会への参加程度など
- ・ 社会的信頼の指標：「大半の人は信頼できる」への賛意など
- ・ コミュニティ・ボランティア活動の指標：人口1,000人当たりNPO数、前年のボランティアへの平均参加回数など
- ・ コミュニティ組織生活の指標：グループ所属の平均数など

### 4. 日本の行政が推進するソーシャル・キャピタル

日本においては、国も地方自治体も、このソーシャル・キャピタルには関心を示している。はやくは、2002年6月には、内閣府が『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市

民活動の好循環を求めて』を発表し、その中で、ソーシャル・キャピタルが国民生活に影響を及ぼす可能性を分析し、ソーシャル・キャピタル指数を試算した。その指標化に際して、ソーシャル・キャピタルを構成する3要素として、「付き合い・交流」、「信頼」、「社会参加」を決め、それぞれの程度を表す個別指標をもって指数化している。<sup>26</sup>

また、ソーシャル・キャピタルと市民活動が互いに影響しあい高めあう関係にあること、NPOがコミュニケーションの場となりソーシャル・キャピタルの培養の苗床となる可能性を秘めていること、失業率の抑制、出生率の維持に寄与、などを指摘している。また、指数をもって、「刑法犯認知件数との相関」や「合計特殊出生率との相関」関係を都道府県別に比較した。

その後、2005年8月に、『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書』を出すなど、調査・研究を継続している。

地方自治体の例示をひとつ示すことにする。それは、さいたま市市民局が行った「ソーシャル・キャピタル」に関する基礎調査である。この調査は、2007年、2008年と相次いで実施されたが、2007年調査の趣旨は、「本調査は、市民の協調行動に深い関わりがあるとされるソーシャル・キャピタルという概念に着目し、ソーシャル・キャピタルを量的かつ質的に把握することにより、次年度から本格的にスタートする市民活動や協働を推進するための有効な施策検討への示唆を得ることを目的とした」<sup>27</sup>と書かれている。さいたま市は、政策課題の解決・改善は、地域社会における人と人のつながりの再生・強化、すなわち、ソーシャル・キャピタル向上と両輪で進めていくべきであると考えている。また、2008年調査の「はじめに」において、ソーシャル・キャピタルに対する行政の役割として、「市民活動に関心のない層を含めた全ての市民がソーシャル・キャピタルを自らの力で維持・向上させやすい環境づくりを進めていくことに他ならない。すなわち、市政の様々な分野の政策課題の解決・改善に資するソーシャル・キャピタルの向上は勿論であるが、政策課題の真の解決・改善につながるようなグラスルーツ（草の根）のソーシャル・キャピタルを育てていくことが重要と考える。」<sup>28</sup>と表明している。

## 5. ソーシャル・キャピタル向上の方法

アメリカの政治学者アポフ（Norman Uphoff）は、人々が自律的に協調行動を行えるような共生的なコミュニティを構築するためには、橋渡し型で認知的なソーシャル・キャピタルの醸成が必要であるとした。つまり、以下のように、ソーシャル・キャピタルの分類を、以下の二つの分類軸で行った場合、望ましい組み合わせを示したのである。<sup>29</sup>

結束型（組織内の人々を結ぶ）—— 橋渡し型（組織間や異質な人々を結ぶ）

構造的（役割、規則、慣例等）—— 認知的（価値観、互惠性の規範、態度、信念）

また、経済学者の稲葉陽二は、社会関係資本に大きな影響を与える要素をレベルごとに示した。

（個人レベル）

- ① 幼年期の家族との交わりと教育
- ② ネットを通しての友人・知人関係

（コミュニティレベル）

- ① 近所づきあいの在り方      ② 都市・住居の構造

（マクロレベル）

経済格差の縮小努力

これらの研究から、ソーシャル・キャピタルの向上に向けて推進すべきこととして、以下の項目が考えられる。

- ① 知的価値観（信頼、規範）の形成  
② 個人と社会とのつながりを自覚させる教育  
③ 社会貢献など利他的行動の重要性についての認識を育む  
④ 交際範囲の拡大により互恵的規範が培われる

## 第4章 ボランティア活動がもたらすもの

### 1. 2種類のボランティアリズムと人間性

ボランティアリズムというのは、「ボランティアの精神」とか、「ボランティアの心」とかいった意味の言葉である。ボランティア活動の研究者である岡本栄一は、そのボランティアリズムが、時代を超え、国家を超えて、それぞれの社会に大きなものを与えてきたことを次のように表現している。

「ボランティアリズムは単なる観念ではなく、歴史のなかで生きて働いてきた。それぞれの民族や共同体や国の歴史のなかで、土木、医療、文化、教育、防犯、福祉などの進歩に貢献してきた。それは民衆レベルから共同体成員をつなぎ、支え、勇気づけ、守り、新しい事業を開発し、組織化し、制度に架橋する連帯精神であったといえる。」<sup>30</sup>

このボランティアリズムは、2種類に大別できる。一つは、ソーシャル・キャピタルの基盤となる「互恵的利他行動」を生みだす心であり、日常において湧出する一般的な人間性を指す。もう一つは、極限状態に置かれた人に手を差し伸べるような行動を動機づける確固とした理念あるいは強い利他愛といったものであり、非日常において湧出する人間性を指す。「捨身の利他心」とでも呼べるものである。

前者に関しては、市場原理・競争原理が働く社会において個人主義を補う要素となると考えられている。

「コールマンによれば、ボランティアリズム（あるいはボランタリー・アソシエーション）は、『ソーシャル・キャピタル』としてアメリカ人に明確に認識されている。ボランティアリズムは、市場原理が働く個人主義を補い、従来の社会規範や信頼にもとづく社会的紐帯、『ソーシャル・キャピタル』を機能させる重要な要素である。」<sup>31</sup>

また、そうした意味のボランティアリズムは、原型共同体の中に見出すことができるということ、NGOの経験から語っているのは中田豊一である。彼は、人間性を「人情」類似の概念と規定している。そして、いくつかのエピソードで、私たちが失ってしまった人間性とは何

なのかという問いを発している。<sup>32</sup>彼の著書『人間性未来論』から、得がたい示唆が得られるので引用する。

「人間が人間であることの本質を指して呼ばれる『人間性』。それはいったいどのような性質を指すのだろうか。」<sup>33</sup>「語義から言えば、『人間性』には否定的な性質も含みうるので、『人情』と完全に重なるわけではない。」<sup>34</sup>

「私にとっての途上国経験の原点は、最初に長期滞在したバングラデシュにある。最初ということは私がまだ若かったということで、それだけに印象は強烈だった。中でも折に触れて思い起こされるのは、人々のおせっかいなまでの人懐こさである。

ラオスの子どもたちは、友達が孤立したままで集団を離れることを許さない。…子どもでも大人でも、伝統的な村落社会を基礎にしている国々に住む人たちは、他者の寂しさ、孤立感に対する感受性がとても強い。」<sup>35</sup>

「他者のさびしさに共感する感受性とそれに反応して行動するエネルギーこそが、開発途上国の人々の人情の中核なのであった。」<sup>36</sup>

「ネパールでは長距離バスで隣どうしにでもなろうものなら、どちらからともなく世間話が始まり、互いのことを事細かに紹介しながら乗っていくのが普通だ。…隣に座った人が寂しく無いだろうか、退屈していないだろうか、と気を遣うことがどうしておせっかいなものか。…人と人をつなぐ絆を維持する心的なエネルギーが私たちの社会では著しく衰退した。」<sup>37</sup>

さて、後者のボランティアズムに関しては、「民間救済型の活動」を生み出すもので、前者の「近隣相互扶助型の活動」を生み出すものとは一線を画す。<sup>38</sup>本稿においては、第1章ボランティアの定義において、マザー・テレサを引用して「互恵的利他行動」を超えるボランティア活動を生み出す「顔の体験」に論究している。彼女はノーベル賞を受賞した偉人である。彼女が行ったような、貧困で路上死が生じてしまう国の惨状を見かねて単身インドの地にわたって献身的な活動を行うというような活動は、誰でもができるボランティア活動ではない。阿部志郎は、そのマザーのボランティアズムにも触れながら、後者の意味をわかりやすくまとめている。

「ボランティアズムは、倒れている人がいれば、ともかく助け起こすというところから始まるのではないかと考えざるをえないのです。マザー・テレサにしても、ゼノさん、またトムソン先生にしましても、どこか一脈通じるものが、その生き方にあると思います。（中略）けれども、マザー・テレサにしる、ゼノ修道士にしる、またトムソンさんにしる、決して制度の上に、安住をしません。そういう中で、隣人と共に生きるということ、生き方として実践的に示し、それを社会に広げていくという努力が、常にありました。」<sup>39</sup>

後者のボランティアズムに関しては、哲学の立場から「愛」や「苦しみとの共生」という概念での説明が試みられている。中里巧の『共生と福祉』から引用する。

「ガンジーは、断食によって暴動と内乱を止めたのであった。これが精神の力の発現である。こうした精神の力の発現は、決して超能力といったものではあり得ない。あえて言えば、人間誰もがもっている愛による業なのだ。愛は、身体・心・精神からなる人間存在すべての位相を貫くものである。たとえば、身体の次元では快感、心の次元では恋愛感情や家族愛、精

神の次元では犠牲愛といったように、感覚や感情のみならず、意志や知性としても、愛は働くのである。こうした愛は人間誰もがもっているのであるが、未だなお十全に働かないまま眠っている場合が多いのである。

眼前の人間を理解する最良の方法はその人の苦しみを理解することであるということなのである。(中略) 苦しみのようなものであるかは、痛みの体験を通してしか知ることができないのであるが、核となるようないくつかの痛みの体験を材料にして、そうした材料を想像力によってふくらませて、自由にイメージすることによって、実際には体験したことのない痛みや他人の苦しみにしても、想像することができるようになるのである。言い換えれば、苦しみを理解するためには、感性、情緒、想像力が必要なのである。」<sup>40</sup>

「苦しみや痛みを克服するために、苦しみや痛みと向き合うという意味で、『苦しみとの共生』が主張できると思う。『苦しみとの共生』には、精神の力とりわけ愛と呼ばれる働きが必要である」<sup>41</sup>

## 2. 自己変革

「ボランティア活動とは何か」ひとことで表現するなら「人間と社会の変革」を目指した、人々の良心に基づいた活動であるということが出来る。<sup>42</sup>

ボランティア活動はいま、人間性豊かなライフスタイルを獲得するための「自己実現」のための学びとして注目される。<sup>43</sup>

いくつかの自己変革のプロセスを例示することができる。

- ・社会問題への挑戦 ⇒ 達成感（価値の実現、生きがい）、失敗して無力感を覚えることもある。
- ・自発的義務感・使命感に突き動かされる ⇒ 利他（他者を生かす）自利（社会的機能の発揮による幸福感、宗教的教義の達成による精神的安心）
- ・ボランティアの仲間づくり ⇒ 平等な社会関係の中で居心地がよく、居場所として認識する ⇒ 情緒安定
- ・真善美の追求と言われる自己実現欲求の充足 ⇒ 人格の完成による幸福感

いずれにしても、従来の狭い自己意識が広がり、自己実現（存在、能力、時間、人格等を生かす）、自己開発に向かっていくことがわかる。

## 3. 社会変革

まちづくりによって地域社会を変革するということには、二つの動機に大別されるようである。一つは、社会連帯を広げていこうという動機であり、もう一つは、地域の課題の中で緊急に解決しなければならないことがあるという動機である。ここに、その考え方の枠組みを紹介する。

ボランティアの行われる基盤として、ひとつには、「連帯」と、もうひとつ止むに止まれぬ「世直しの緊急性」とがあげられよう。（「自分のアイデンティティを確立するため」などの思いに突き動かされてボランティアに参加する人も多いが、それらの根底にあるのは、住



民同士の、さらには、人類全体の「連帯意識」と「緊急性の意識」にはかならない。<sup>44</sup>

連帯に連なる社会変革は、単なる助け合いから、自覚した市民たちの社会形成へと共生価値を拡げたり、自利利他の文化を広げたりする使命がある。さらに、活動それ自体の中に、活動における平等な関係の形成があって、まちの居心地が向上するというメリットがある。

今日重要な視点は、セクター間の壁を超えてつながったり、多様な世代をつなげたり、人種・国境を超える、貧富の差も、宗教の壁も多様な価値観も超えるといった、ネットワークキングである。

一方、地域の緊急な課題を解決する目的をもった「まちづくり」は、さまざまな課題に挑戦しなければならない。第2章で詳述した、地域住民の人間性を損ないかねない問題が山積しているからである。

上記した二つの社会変革は、絡み合っていることが相乗効果を持つということがある。たとえば、無関心な住民に社会連帯を呼びかけても見向きもしないかもしれないが、地域の課題は他人ごとではない緊急性をもっていることを伝えられれば、関心を引き起こせるからである。

#### 4. 各世代のボランティア活動の意義

##### (1) 児童・生徒のボランティア学習

学校教育において、市民学習あるいはボランティア体験学習が普及している。それは、「総合的な学習の時間」だったり、学校ぐるみのボランティア学習普及事業協力校だったり、都立高校では、「奉仕」という科目が必修となっている。こうした潮流の中で、筆者はボランティアの体験が子どもたちにどのような影響を及ぼしているかの研究を1998年に行った。<sup>45</sup>

その結論として、「人間性への気づき」として、以下の4項目を挙げている。

- ① 自分には人や社会のためにできる事がある」ということに気づく（自己の人間性の目覚め）
- ② 地域の人々の生活の様子を肌で感じ、市民生活の中に息づく人間性に気づく
- ③ ボランティア活動を通して、社会の一員としての役割を担うことにより社会的自我を確立する
- ④ 福祉問題との出会いを通じては、人生の四苦八苦を知り、また、それを乗り越える人間のあり方を学ぶ

##### (2) 学生の共生体験

短期大学学生が、共生の価値を学ぶために行ったボランティア活動に関する研究を、筆者は2011年に行った。<sup>46</sup>最後の全体発表の後、学生たちが書いた感想文から、いくつか紹介する。

「今までの考えが180度変わったと言っていた人が多かったので、機会があれば、保育とは違う分野の体験ができたらいいなと思いました」

「皆、共生体験を通して考え方や思いが変わってきたようだった」

「ともに生きる事に喜びを感じたというのが、発表を聞いての共通の印象だった」

「ボランティア活動の動機が芽生えた」

「ボランティアを行ってみたいという意欲がわきました」

「今度ボランティアはこれをやりたいとか自分の中で意志もちゃんと見えてきたような気がします」

「『共生論』がなければ、『ともに生きる』ということを考えなかったと思います。これからは、『ともに生きる』ということを考えて一日一日を大切に過ごしたい」

「人を援助する心の持ち方を学べた」

### （3）団塊世代の社会参加

中高年世代のボランティア活動をはじめとする社会参加を促進する板橋区の事業を企画運営した際、受講を終えた参加者から、貴重な意見を聞くことができた。筆者の2009年の研究から、以下に引用するのは、地域の社会資源に気づかせることを行うワークショップを実施後に寄せられた感想である。<sup>47</sup>

- これからの「セカンドステージ」を、社会資源を上手に利用し、地域の方々と「楽しい」老後を過ごす事ができますよう、努力していこうと思っております。
- 退職から2か月余り、自分の行動範囲が狭く、地図に書き込むことにより、改めて痛感しました。時間があるのに、だらだらと流れてしまい腰が重くなってしまう。これからは考えすぎずに、一步踏み出したい気持ちになりました。
- 個人主義の傾向や地域の間関係の煩わしさを考えると、地域に踏み出すのは勇気がいることだと思います。
- 生きがいを持つためには何をするか？ 自分の住む地域で生きがいを見つけるのが一番。次に、ボランティア体験を終えての感想を引用する。
- 「地域に踏み出す」ことは、自分のための豊かな学習になる（学習性）し、自分の中の優しさの発揮（自己実現性）もでき、良い人間関係の輪づくり（社会連帯性）まで期待できる。
- 年をとった時、どうしたら良いのかを考えている。ボランティアとは、崇高な精神の持ち主と思っていた。石川先生の話聞いて、自分の行動もボランティアだと思った。

## 第5章 まちづくりボランティア

### 1. まちづくりのハードル

#### （1）地域コミュニティづくりにおけるハードル

広井良典は次の5つを挙げている。<sup>48</sup>

- ① 関心が低い
- ② 会社への帰属意識が高い（地域とのかかわりが薄くなる）
- ③ 若者の流出等の人口減少
- ④ 新住民と旧住民の間の距離が大きい

- ⑤ 気軽に集まれるような場所が少ない
- ⑥ 地域経済が衰退し雇用機会が少ない

## （2）ボランティア・NPOへの偏見

また、ボランティアは偽善だなどという声もよく聞く。最近では、台頭するNPOが犯罪行為をすることもあって、NPOは自分たちの利益を追求するための隠れ蓑であるという先入観で見える人も出てきた。

次のような加藤哲夫による分析もうなづける。

「倫理的に見える行動に反発が多いのは、誰もが自分を振り返ればわかるように、欲得抜きで行動しないとおもっているから。どうも疑わしいという躊躇する心が生まれる。」<sup>49</sup>

## （3）日本文化の阻害要因

日本の文化とキリスト教文化圏を比較して、「恥の文化、罪の文化」の考え方が示されたが、日本人の「恥ずかしくないか」という行動基準はボランティア活動には阻害要因となる。隣人愛を絶対的な行動基準にしているキリスト教徒ならば、人を助け起こすことに躊躇はない。一方、日本人は、自分の助け起こす行為が、周囲から見て浮いているのではないだろうかと躊躇する。行動に移すには、大きな勇気が必要となる。

「ウチとソト」という文化も影響を与える。これに関して、西村祐子による次の分析がある。

「日本社会は、顔見知りの関係によって長く続いている共同体や、よく知っている取引先との商売を優先させる。他者一般に信頼をおかず、むしろ既知の関係に頼る度合いが多い。これでは、社会関係を外へ拡大することによって得られる多くの利益を失うことになる。」

一方、アメリカのように、集団主義でなく個人主義の社会では、「人間関係の中で他人の心や性質を理解し、関係調整をはかる能力、即ち「社会的知性」が必要とされる。… 他者の信頼性を示唆する情報に敏感で、相互作用相手の信頼性を見抜く力を持っている。既存の関係に安住するより多くのチャンスを得て、結局は自己利益が増大する。」<sup>50</sup>

## 2. 板橋区の実践事例「地域センターごとの、まちの学校」

### （1）最初のエリアの報告

板橋区は、町会自治会の加入率が5割程度まで下がってしまった。行政では、「自治力アップ地域会議」という構想を持って、地域の連帯を呼び覚ませようとしたが、既存の事業だけでも疲弊している町会自治会の協力が思うように得られず頓挫している。

一方、区内のNPOは台頭して活発な活動を展開している。いたばし総合ボランティアセンターも、「NPO法人ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし」（以下、学習推進センターと呼ぶ）が板橋区から受託して運営管理を行っている。

筆者もその学習推進センターの理事として活動しているが、今年度から区内18地域センターごとの、「まち（地域）の学校」を立ち上げることに成功した。これは、共催者として、板橋区、板橋区教育委員会、いたばし総合ボランティアセンターの三者が名を連ね、協働し

ている。今年度は、スタートの年として、年度後半に5地域センターエリアで実施する。板橋区としては、さまざまに生起する地域課題を公私協働で解決する目的を持ち、総合ボランティアセンターは、人間性豊かなまちづくりを志向している。板橋区は、18地域センターごとの「自治力アップ地域会議」に期待したことを、この「まちの学校」にも期待しているのかもしれない。学習推進センターとしては、過去30数年のまちづくりの経験から、50万強の人口を擁する区内に1個のボランティアセンターがあっても、「まちづくり」は成功しないことがわかっている。また、地域課題の多くは、小地域の連帯が解決のカギを握っていることも承知だが、その地域連帯が御多分にもれず、板橋区内でも希薄化が進んでいる。つまり、この「まちの学校」は、地域センターエリア内の社会連帯を再構築するために、住民の多くの人間性を湧出させる仕掛けを施すこととなった。まず、3回シリーズの講座に、エリア内住人を多数参加させるという「プロセスゴール」である。次に、今回は、高齢者ケアと防災・減災の二つだが、それに関するエリア内ステークホルダーとなる機関・施設・行政担当者・住民のリーダーの参加によってネットワークをつくるという「リレーションシップゴール」である。三つ目は、参加者が講座に参加することによって、テーマに関する無知・無関心・想像力の欠如を打破することができる学習を構成し、学習効果を上げるという「タスクゴール」であった。

まず、清水地域センターエリアで実施した。(2013年9月11日、25日、10月5日)結果は以下の通りであった。

① プロセスゴールに関して

初日の参加者が75名、2日目が58名、3日目が64名と会場いっぱいの参加を実現した。

② リレーションシップゴール

参加者をみると、エリア内の各町会関係者、行政担当者、民生委員、地域包括支援センター、社会福祉協議会、国際視覚障害者援護協会、あいキッズ(放課後学童支援)、おとしより相談センター、高齢者サロンを実施しているNPO、訪問介護リハステーション、ケアサービス事業所等の参加が得られ、グループディスカッションにより、親しく交流し、感想文中でも、「地域の方と知り合うことができ、災害時に助け合うネットワークをつくることができました」という声があった。

③ タスクゴール

講座内容は以下の通りだった。

[第1回目] DVD視聴(都市直下型地震「延焼運命共同体」)⇒ 東大都市基盤安全工学国際研究センター准教授加藤孝明氏の講義 ⇒ グループディスカッション(司会:筆者)⇒ 全体会

[第2回目] DVD視聴(老人漂流社会「終の住処はどこに」)⇒ 板橋区おとしより保健福祉センター初代所長、日本地域福祉研究所主任研究員國光登志子氏の講義 ⇒ グループディスカッション(司会:筆者)⇒ 全体会

[第3回目] 1,2回目のまとめ ⇒ グループディスカッション ⇒ 全体会(すべて筆者)

1,2回参加者の意見・感想を、二つの課題に共通する枠組みである、自助、互助

（共助）、公助に分けて示す。おおむね期待通りの学習成果が上がったようである。  
整理する。

- 自助
  - 無関心ではいけないと痛感した（はっきりとした意識を持つことが大切）
  - 自助があってこそ共助が成り立つ（自助が共助につながる）
  - 自分防災マップづくり（どこにどの経路で逃げればよいかを知る）
  - 初期消火の大切さを知る
  - 火災延焼時の逃げるタイミングを知る
  - ふだんから地域の方とふれあう
  - 老後の蓄えをする（格差社会の中で、希望通りの最期を迎えるために）
- 互助（共助）
  - 学んだ情報を地域の皆に伝えたい
  - 町内会の近隣ブロックの絆を強めたい
  - 身寄りのない人が「ひとりで死んでいく」を防ぎたい
  - 「死」を禁句にせず、「リビングウィル」や「看取り」について話したい
  - 生きた教材（相互の介護経験など）を友人と話したい
  - 訓練・学習への参加の促し（誘い合う地域ぐるみ）
- 公助
  - 終の住処に関する公助はどうなっているか
  - 特別養護老人ホームの待機者がショートステイを渡り歩く実態がある
  - サービス付き高齢者専用住宅の現状（国が推進）
  - 低所得高齢者住宅（NPOが運営）
  - 年金が100万円以下等の低所得者が入所できる施設を増やすべき
  - 介護保険法の理念が実施されるにはほど遠い（制度の不完全）
  - 災害時の要援護者の把握
  - 延焼シミュレーションに基づく訓練・学習会の実施が望まれる

## （2）今後の展開

同じような枠組みで、エリアごと、順次実施していく。

それぞれ、3回の講座終了後に、来年度の準備会を各エリアで実施する。「意識の共有」を図るため、講座のときのような堅苦しいものではなく、車座になって話し合えるような雰囲気のものとする。酒席も用意する。

住民主体で展開するので、エリアごとに方向性が異なってくるはずである。唯一、学習推進センターが構想しているのは、エリアごとのボランティア・ビューローづくりである。学習推進センターはその予算も余剰人材もないので、その実現には、エリア内住民の参加が不可欠である。

この実践の成功こそが、本稿の「まちづくり」に関するボランティア理論の検証になることは言うまでもない。

## おわりに

真理の扉が開いた。  
実存的孤独に苦しむ人が見える、そうでない人も見える。  
私たちの歩むべき道、人と社会をつなげるわずかな道も見える。  
善意の声が聞こえる。  
一緒に歩いてくれる仲間がやってきた。  
孤独な旅は終わって、日々の道行が待ち遠しい。  
美しい景色が見える。  
足元の草花に気づき、夕焼けに引き込まれる。  
自然は満ち、命の輝きに満ちている。  
人々の心が潤い、まち全体が潤う、そんな  
人間性豊かなまちづくりというゴールは近づいた。  
ひとびとよ、足を地につけ、まちに出よう。

最後に、重要な言葉を引用したい。30数年、ともに活動しているボランティア活動の大先輩が、40年近く前に書かれた言葉である。本稿のキーワードである「互惠的利他行動」に該当する言葉が「人間的必然」という言葉で語られ、示唆に富む論述がある。<sup>51</sup>

『『ともに生きていない』という状況、現実の因果関係、必然性は決して生活より遊離し、遠くにあるものではなく、私達ひとりひとりの価値観、人間観、更に生命観に根差した日常的生活態度の中に多く観られるという、自分自身の内的発見への願いです。』<sup>52</sup>

「表面的な、一時の余力としての、人間的必然という自身の無意識の美名化とも思える行為に不安を感じずにはいられないのです。仮に不景気や物質不足等の社会不安が今以上に激化したらどうであろうか。やがて障害者（弱者）の人権、尊厳は砂上の楼閣として崩れ、強者優先の修羅場が再び訪れないとは、いえないと思えるのです。」<sup>53</sup>

真のボランティア活動を推進することは、それは正に「ボランティア文明」の創造することなのだと思えさせる。すなわち、「モノ、カネ、情報」が支配する現代にあって、それ以上の価値として「ともに生きる」という価値を実現しなければならない。また、格差社会が進行する社会にあって「人間の平等性」を実現しなければならない。さらに、世俗化した世の中にあって、生命の尊厳を見失っている社会を生命の輝きで照らさなければならないのではないか。

22 私は、確固とした価値観、人間観、生命観を踏まえたくて、世の中の支配的価値や不景気等の社会不安などに負けない「まちづくり」を目指すことを、改めて決意することができた。

本稿の副題を決めるにあたって「ボランティア文明に向かって」にしたかったが、無難な「人間性豊かなまちを目指して」にしてしまった。できることから少しずつという消極性が出てしまう。しかし、心の奥底ではそのテーマを30数年以上持ち続け、現にボランティア文明に向かって突き進んでいる人達と共に「まちづくり」の活動している。

参考文献

- 1 長谷川寿一、長谷川眞理子『進化と人間行動』東京大学出版会、2000、p.163
- 2 長谷川寿一、長谷川眞理子 前掲書1、p.164
- 3 長谷川寿一、長谷川眞理子 前掲書1、p.6
- 4 長谷川寿一、長谷川眞理子 前掲書1、P.8
- 5 長谷川寿一、長谷川眞理子 前掲書1、p.92
- 6 長谷川寿一、長谷川眞理子 前掲書1、P.167
- 7 長谷川寿一、長谷川眞理子 前掲書1、P.93
- 8 岡田尊司『社会脳』PHP研究所、2007、P.62
- 9 宮城音弥『人間性の心理学』岩波書店、1968
- 10 神谷美恵子『こころの旅』みすず書房、2005
- 11 磯村英一編著『コミュニティの理論と政策』東海大学出版会、1983、はじめに i
- 12 塩原、松原、大橋編『社会学の基礎知識』有斐閣、1961、p.35
- 13 デュルケム、井伊玄太郎訳『社会分業論上』講談社、1989、p.105-106
- 14 レヴィナス、熊野純彦訳『全体性と無限』岩波書店、2005、p.49
- 15 レヴィナス、熊野純彦訳 前掲書11、p.45
- 16 レヴィナス、熊野純彦訳 前掲書11、p.53
- 17 吹浦忠正『海外ボランティア入門』自由国民社、1994、p.65
- 18 岡田尊司『人格障害の時代』平凡社、2004
- 19 岡田尊司 前掲書15、p.184
- 20 広井良典『コミュニティを問いなおす』筑摩書房、2009、p.178
- 21 広井良典 前掲書16、p.151
- 22 高瀬、的場編『a t プラス0 2』太田出版、2009.11、p.10
- 23 高瀬、的場編 前掲書18、p.11、p.204
- 24 竹村牧男、松尾友矩編著『共生のかたち』誠信書房、2006、p.204
- 25 Robert D. Putnam『一人でドウリング～アメリカのコミュニティの崩壊と再生』、2000、p.357
- 26 内閣府『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』2002.6、p.126-131
- 27『ソーシャル・キャピタル向上に向けた基礎調査（その2）～心豊かな市民社会の実現を目指して～』報告書、さいたま市市民局市民部コミュニティ課市民活動支援室、2008
- 28『ソーシャル・キャピタル向上に向けた基礎調査』報告書、さいたま市市民局市民部コミュニティ課市民活動支援室、2007.3
- 29 稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門』中央公論社、2011、p.173
- 30 日本地域福祉学会編『地域福祉事典』、中央法規出版、2006、p.385
- 31 西村祐子編著『草の根NPOのまちづくり』勁草書房、2004、p.85
- 32 中田豊一『人間性未来論』竹林館、2007
- 33 中田豊一 前掲書28、p.14
- 34 中田豊一 前掲書28、p.15
- 35 中田豊一 前掲書28、P.18
- 36 中田豊一 前掲書28、P.19

- 37 中田豊一 前掲書28、P.21
- 38 岡田藤太郎『現代社会福祉学』勁草書房、1968、p.61
- 39 阿部志郎『福祉の心』海声社、1987、p.113-114
- 40 中里巧「共生と福祉」『共生のかたち』誠信書房、2006、p.155-161
- 41 中里巧 前掲書36、p.162
- 42 興梠寛「ボランティア新時代に向かって～ボランティアネットワーク～」1997、p.215
- 43 興梠寛 前掲書38、p.216
- 44 田村正勝編著『ボランティア論～共生の理念と実践』、ネルヴァ書房、2009、p.3
- 45 拙稿「児童・生徒のボランティア学習」『淑徳短期大学研究紀要第37号』1998
- 46 拙稿「『共生論』の学習者の意識変容」『淑徳短期大学研究紀要第50号』2011
- 47 拙稿「団塊世代の社会参加」『淑徳短期大学研究紀要第48号』2009
- 48 広井良典『コミュニティを問いなおす』筑摩書房、2009、p.78～
- 49 加藤哲夫『市民の日本語』ひつじ書房、2002、p.140
- 50 西村祐子編著 前掲書31、p.88
- 51 加藤勉「特殊化されている心身障害者問題を考える」『ボランティア文明に向かって』社団法人  
日本青年奉仕協会、1975
- 52 加藤勉 前掲書46、p.252
- 53 加藤勉 前掲書46、P.255